

UCS 取締役社長 渡邊勝明さん インタビュー

聞き手：2chペトリスレ リバーアダプタ

発行：2016.4.25

本文書の無断転載、引用を禁じます。引用には渡邊勝明さん及びリバーアダプタの許可をとってください。

2015年12月5日、ペトリOBで、現UCS 締役社長 渡邊勝明さんからお聞きした内容を、リバースアダプタが項目ごとに伝聞の形でまとめました。

#### 入社されたころ

昭和18年生まれで、上野高校の夜間に通いつつペトリに入ったそうです。

当時は、ペトリペンタがラインを流れていたとのこと。ペトリペンタ初期がシャフトで無いのはご存知でしたが、シャフトに変更になった理由はわからないそうです。

ペンタの1/1000は、手間をかけて精度を出せないで落としたのだろうとのこと。やろうと思えば、1/1000の調整はできるそうです。

#### フレックス7と海外勤務について

フレックス7は販売当初クレームがあり、その修理のために、まずアメリカに行かれたそう。

問題はフィルム送り。かしめが緩んで、フィルムが送れなくなるということで、ほぼ全バラシしないと修理できない場所とのことでした。

フレックス7のフィルム室に印字と出荷時期についてお聞きしましたが、詳しくはわからないが、印字があるのなら出荷はしたのではないかとのことでした。

まず、アメリカに3ヶ月、イギリスに3ヶ月いらっしたそうです。

アメリカに行っていたときはフォトクローム社（ペトリのディストリビューターだった）にいらっしたそうです。日曜日は会社はお休みだが、アパートに持って帰って仕事されていたそう。そんな感じなのでアメリカの記憶はほぼないそうです。自由の女神を見たぐらいとのこと。

また、給料が安くてまともに食えなかったのもつらかったそうで、海苔巻き1本で朝食というような感じでやっていたとのこと。理由は、以前のアメリカ駐在は行く前は月450ドルだったが、明細を見た社長（敏夫氏）が、金額が余っていたので、300ドルにしてしまったから。この金額では食うにも困る状況だったそうで、当時同じ仕事

をしていた仲間が7人いらっしやったそうですが、ハンバーガー1個で朝昼兼用みたいな感じだったそうです。

栗林敏夫 社長はケチで、その後、ヨーロッパにいらっしやった頃にも、たまにやってきたそう。

本人が朝出てくるという時間より、実際ははやく出てきて、社員が出てきてるか見ていて、こちらもお見通しなので、早めに出るなんてこともしていたそう。

中華と一緒に食べたが、お前らいつも食べているのかと聞かれ（給料が安いので食えないため）腹が立ったとのこと。

敏夫 社長は、葉巻が好きだが、安いのみか買わない。酒は飲まない。実は、かつらで、途中で直しに行く（笑）。

社長のお子さんが本社の中で遊んでいたのを覚えていらっしやるそうです。今は50歳ぐらい？。

ペトリはイタリアでは人気があって、特に7sがよく売れたそうです。イタリアでのシェアはトップだったのではないかとのことですが理由はわからないそう。デザイン？

ミラノにいらしたそうですが、当時イタリアで修理もメーカーが直接やってるのはペトリぐらいだそうで他社は外注していたとのこと。ただし修理していたのは専門の日本企業で、修理していたのは日本人だったとのこと。

国内に戻ってから倒産まで

27歳の時に(70年)日本に戻ってこられたそうです。

望遠レンズの製造に関しては、カメラの製造の担当だったので、正確なことはわからないとのこと。どこまでが内製で、どこまでが外注か？など。だだ、望遠レンズをサンに作らせていたのは確かとのこと。

ES オートは梅島で組んでいたそうです。（セイコー製シャッターは、新品の在庫がUCSにあるので修理可能とのこと。）

長野で組んだのは REII ではなくて RE のほうだったとのことでした。設計はペトリの人ではなく菊池さんという方。（社名は忘れてしまわれたようです）ペトリから何人が連れて行って作業されたそうです。

フィンカメラにも在籍されていたので、取り扱っていたことが判明している REII についてもお聞きしましたが記憶にないとのことでした。

輸出検査は本社工場でやっていたそうです。

試験官が来る日は、冬は朝 5 時から暖房をつけて部屋を温めていた。そうしないとシャッタースピードが出ないなど不良になるためとのこと。

不良が出ると、輸出できないので大変だったそうです。契約でバイヤーズブランドごと台数が決まっているので数が足りなくなるため。なので徹夜で組むことも多く mf-1 の頃は週に 3 日は徹夜していたとのこと。

検査に手心を加えて欲しくて、試験官を接待したりもしたとのこと。でもやはり人によるそうで、全く融通のきかない試験官もいたそうです。

こんな状態なので、末期の品質はもちろん落ちていたとのこと。

ペトリが潰れてイタリアに行かれたそう。フィンカメラのイタリア人の社長さんが渡邊さんをお世話になってくれていたためとのこと。

柳澤さんのこと。

柳澤さんは酒が強かったそうで、朝の五時まで付き合い飲んで、へろへろになっているところで、君弱いねと言われたそう。柳澤さんは飲み屋では大学教授ということになっていたそうです（笑）

柳澤さんもいらっしゃったゼニックスのカメラも、フィンで買っていたそうです。またフィンでは、九州の阿久根の方で作った物も、ちゃちなカメラだが扱っていたそう。

コニカ C35 について、柳澤さんが設計したという記憶があるそうです。コニカ C35 をペトリで調整していたのは覚えているとのことでした。

コニカ C35、コシナ 35 コンパクト E、ペトリ M35 は構造がそっくりなことが知られていますが、残念ながら実際にどのようなかわりがあったかはわからないとのことでした。

その他のペトリに関すること

専務だった高尾さんは去年(2014年)お亡くなりになったそうです。

シャッターは、カーペルと書いていても、中身はセイコーなこともあり。とりあえず、あるもので組んでいたのだろうとのこと。

生産は一眼の方が大変。レンズシャッターが 10 人なら 25 人ぐらい人手がかかるそうです。

エイトショウという、土曜日の 11 時から ペトリ 8 の名前を冠したテレビ番組をやっていた。でも、広告費はそれほど使っていない。それでも、グリーン 0 マチックはよく売れたとのこと。

渡邊さんが入って何年かしてから、本社工場は建増しされた。

PR07 は沖縄で作っていた。

フォトクロームは売れなかった。アイデアは面白いが、市場に合わなければ売れない。

レンズは本社の 3 階と黒羽工場で作っていた。ペトリの礎材(レンズ)は良い。黒羽で作ったレンズはニコンに収めていた。

一眼レフのシャッターダイヤルの 1/15 のところが黄色なのは、秋山正太郎が言ったから。理由はわからない。手ブレ限界？

UCS とペトリの修理について

ペトリの修理は単に組むだけではダメで、叩いたり削ったりしないといけないため鍛えられるので、ペトリがなおせればなんでも直せるようになるそうです。逆はないとのこと。ペトリ出身者は、応用がきくから他社に転職しても重宝されたそうです。

一眼レフで修理に入ってくるのは巻き上げ不良。精度不良が多いとのこと。

巻き上げ不良は、中で緩んで外れたネジが挟まっているものもあり。また、シャッター幕が戻りきらずに巻き上げできないのものが多く、巻き上げ解除がされていないとのこと。

2016年からUCSとして中古カメラ市に出店することにしたそうで、高島屋 新宿店、CP+ で販売するとのこと。ペトリも少し置きたいとのこと。

昔のペトリの仲間と年2回食事会しているとのこと。

サンが倒産した時、UCSと取引があり800万の仕掛かりがあり大変だったそう。今も社員が35人いて食わしていくのが渡邊さんの最後の仕事とのことでした。

以下はUCSでペトリのレンズシャッター機の修理を担当されている、今回同席された河田さんのお話。(一眼レフは今も渡邊社長が修理されているとのこと)

今までにUCSが中古で売ったペトリは約500台。巻き上げレバーの緩みなど、よくある不具合箇所は、問題なくてもすべて確認しているので、修理したものが帰ってきたことは以外にも(笑)ほぼないとのこと。

カラー35は人気があり、100台は直したそうです。カラー35は電池BOXがダメになっているのが多いのでUCSで部品を作ったそう。

なぜかES-AUTOは、ホットシューにストロボつけないと横のX接点が通電しない謎の仕様だそうです。

以上が今回お聞きした内容になります。渡邊さん、河田さん、貴重なお話をありがとうございました。

文責:リバーリアダプタ